ぼくの友達、けんたん

瀬戸内町立西阿室小学校　三年　仲山　あおい

「おれの名前はけんたん。九十九才の男の子。え、九十九才なら子どもじゃないって。いいのいいの、とにかく男の子。好きな遊びはすもう。だれにも負けないんだから。手足が長く、かみの毛は真っ赤。どう、うらやましいでしょう。君が、どうしてもっていう顔をしているから、友達になってあげるね。よろしくね。」

ぼくのとなりで勝手に自こしょうかいをしているのは、はだしでちょこまかと動くけんたん。かみの毛はぼさぼさで、洋服は着けていない。身に付けているものと言えば、ふんどしだけ。ぼくのじいちゃんでも着けない。九十九才って言っているけれど、本当かな。どこから来たのかな。何年生かな。聞きたいことは山ほどあるけれど、何だか聞きづらい。でも、どうしてぼくについてきているのだろう。自分の学校にはいかないのかな。

学校に着いて教室に入るころには、けんたんはいなくなっていた。すごく気になるわけではないけれど、少し気になる。

朝の会が始まるとき、先生が、

「今日は転校生を連れてきました。」

と言いながら、教室に入ってきた。先生の後ろにいるのは、あのけんたん。びっくりした。しかも、やっぱりふんどし姿。そしてあの自こしょうかい。ぼくに言ったセリフと全く同じ。でも、名前がけんたんなら、名字は何。クラスのみんなはふしぎがることもなく、よろこんでいる。おかしいと思わないところがおかしいと思った。席はぼくのとなり。ため息をつきたくなってきた。

ぼくには友達がいない。いつも登下校は一人。休み時間も一人。家に帰ってからも、だれかと公園で遊んだり、だれかと宿題をしたりなんてしたことがない。クラスのみんなは、ぼくが同じクラスにいることすら頭にないと思う。二人組を作るときがいちばんいやだ。いつも最後まで残って一人になる。そんな時はつらくて、悲しくて、なみだが出そうなるのをぐっとこらえている。でも、もうそろそろげんかい。学校に行くのをやめたいと毎日思うようになってきた。

一時間目が終わって休み時間。

「ねえ、さぶちゃん。すもうとろうよ。」

「え、ぼくと。ぼくはいいよ。」

ぼくは、ぼくをさそってくれるけんたんにびっくりした。今まで遊びにさそわれたことなんかない。だから、本当は今すごくうれしい。でも、みんなに見られると、どう思われるのか不安になる。

「いいから、いいから。ほら、かまえて。」
「いや、やったことないからいいよ。」
「さあ、いくぞ。はっけよおい……。」
ぼくはあわててかまえた。
「のこった。」
ぼくはけんたんの声につられて、いきおいよくけんたんにとっ進していった。けんたんは、ぼくのこうげきをあっさりとかわし、ニタッとわらって手まねきしている。ぼくは、うでをふり回し、ドタドタと足も動かし、こうげきされないようにげ回った。その時、まわりの声が聞こえてきた。
「すもうなのにげ回るなんてへんなの。」
「おれだったらこんな弱いやつ、一しゅんで投げとばしてやるよ。」
クラスの子たちがわらいながらぼくを見ている。もうやめようと思った時、けんたんが、
「だったら、さぶちゃんとすもうとってみなよ。」
とクラスの子たちに言った。ぼくはぎょっとして、両手でバッテンを作った。それなのに、
「さあ、投げとばされるじゅんびはいいか。」
と、男の子たちが列を作って待ちかまえている。
もう、ぼくはあきらめた。投げとばされて、ぼろぼろになるのをかくごした。その時ぼくの耳元でけんたんがささやいた。
「さぶちゃんはだれよりも強いんだ。」
その言葉を聞いたとたん、まほうにかかったみたいに力がわいてきた。
「はっけよおい、のこったあ。」
ぼくは力いっぱいぶつかっていった。あっという間に相手はしりもちをついていた。ぼくが勝つなんて、と思うひまもなく、次から次へとやってくる男の子たちを、ぼくはその場で考えたわざを使って、全員たおしてしまった。自分でも信じられなかった。
「さぶちゃん、すごいじゃないか。」
ぼくに負けた一人が、はく手をしながらぼくに近づいてきた。すると、他のみんなも
「どうして今までだまっていたんだよ。」
と、ぼくの周りをかこんだ。こんなに大ぜいの人に話しかけられたことなんてなくて、ドキドキしてしまった。でも、何だかすごくうれしくて、明日も学校に来たいな、と思った。
　あれから一カ月。ぼくには友達がたくさんできた。毎日学校に行っている。あの後すぐけんたんは転校してしまったけれど、いつかまたけんたんに会って、すもうをとりたいな。